

陶工 原 呉 山

木 村 弘 道

序

原呉山は、明治時代に金沢の鶯谷を中心に活躍した特異な陶工の一人として近年識者の間でも高く評価されつつある。

しかし、近世の陶工としては現存の作品も割合に少なく、また伝記等も詳しくは調べられておらず、その研究は今後に待たなければならない点が多い、本稿は現在までに調べ得たことを紹介したいと思う。まず原呉山の大輪郭を示せば次の如くである。

原呉山の大輪郭

原呉山は本名を与三兵衛、通称を紺屋伊右衛門と云い、呉山あるいは青竹庵または猶文と号していた。文政十年六月十七日、金沢区十間町二十五番屋敷の代々銀座合を勤めた家に、父伊左衛門の長男として生まれた。多芸多才の人で、特に陶工として、また茶人として有名であつたが、明治三十年九月二十八日金沢区鶯町二十四番地で死亡した。以上が一般に認められている原呉山の大輪郭である。

原呉山の経歴

原呉山研究の根本資料としては、今日次のようなものが残されている。

- 一．原呉山具申書。
- 一．金沢市役所の戸籍の原本。
- 一．金沢市野田寺町五丁目極楽寺の過去帳及び墓と、高野如月庵等が建てた碑。
- 一．作品。
- 一．展覧会の出品目録。

等であつて本稿も以下これらの資料による訳である。

原呉山は通称を紺屋与三兵衛と云つたが、その紺屋とは屋号であつたと思われる。祖父も与三兵衛と云つて、蔵宿を業とし、青木木米を招いて開窯した春日山窯にも町会所の吏として関係して、木米の作品や陶法書などを伝えていた。すなわち呉山は祖父の代から焼物に関係のある家柄に生まれ、後年陶工たらしめる機縁はととのつていたのである。そのことは、原呉山自身が明治二十年五月に、当時市尹の調べに答えた「原呉山具申書」と称される文書

によつても明らかである。

元本と思われるものが、現在金沢市立図書館に蔵せられていて、原呉山研究には重要な資料と思われるので、次にその全文を示すこととする。

原呉山具申書

文化四丁卯年龜田鶴山翁ノ発氣ニテ春日山ニ（帝慶山ト云）於テ陶器登リ窯ヲ築キ金城新製ノ陶器産物ヲナサント町会所御用銀方ヨリ諸費御貸渡ニ相成御仕入ヲ以宮竹屋喜左衛門松田平四郎兩人窯元名代トナシ職工京都三条青木佐兵衛陶名杵米ナル者ヲ呼テ数種ノ陶器ヲ製造シ同所ニ於テ売捌来ルニ文化五年ノ冬故アリテ杵米ハ歸京ス其後喜左衛門等諸事引受下職人ノ内春日町越中屋兵吉畫付工任田屋某ノ兩人ヲシテ相續キ来レトモ町会所ヨリノ御仕入ハ相止ミ文政年ノ初度廢業トナル木米滞在中私祖父与三兵衛町会所役義相勤申ニ付職場貸附方等ニ被付日々見巡致居申由ニテ木米製造品及陶法ノ書類ナト今ニ相傳所持罷在依是明治十二年陶器ノ業ヲ志シ聊營業トナシ候事

明治二十年五月

鶯町二十四番地 原 呉 山

この文書によつて呉山が本格的に製陶を業とした時期が解り、また春日山窯の状況も詳しく語られていて、誠に貴重な資料である。

原呉山は誠に多芸多才の人で、和歌を田中躬之に、俳諧を梅田江波に、点茶を裏千家宗春に、香を湯川一井庵に、書道を佐藤某に学んだと云われているが、特に田中躬之や、梅田江波の様な優れた師についたことは、おそらく呉山にとって、後年その個性を形成する上にも大きな影響のあつたことと思われる。

その田中躬之と云うのは、通称を兵庫と云い、菊園と号して、石川郡本吉の儒医の家に生れた人で、初め京都に上つて皇学を加茂季鷹に学び、また医術を新宮涼庭に受けて、天保五年に帰郷した。そして同六年金沢に移つて前田土佐守直時に仕えたが、ときに規諫して退けられたが為、町儒医となつて国学和歌を教授した。

後嘉永五年前田齊泰に召されて藩学明倫堂の講師となり、安政四年には藩命によつて類聚国史欠典補修の事を督したが、業未だ緒に就かずして、同年七月十九日 享年六十二で歿した。その歌集に「菊園遺芳」や「園の菊」があり、後者には男猛之の作も合輯せられている。

また梅田江波は、梅田年風の子である。年風は狩野派の画を以て加賀藩に仕え、俳諧を梅室に学び有名であつた。江波は、通称を九栄、諱は幸直と云つて、父の年風同様画を以て藩に仕えた。俳諧には著六斎・翠台・北枝堂・江波と称し、「東ほうらい」「花の賀」「其

如月」等を著したが、万延元年五月三日享年四十六で歿した。

さて、呉山は「原呉山具申書」によつて、祖父が春日山窯に関係し、木米の作品や陶法の書類等も伝わっており、明治十二年本格的に陶工として歩む様になつたことは解る、が如何に優れた作品とは云え、それをただ眺めていたり書物を読んだ位では到底専門の陶工にはなれるものではない。それ等は大変よい参考にはなるであろうが、やはり適当な指導者について実地に学ばなければならない。また陶工には、一年や二年の修行では、とてもなれるものであつてはないので、如何に豊かな才能のあつた呉山とは云え、少くとも趣味としてでも相当の期間焼物に関係していたことと思われる。そして明治十二年には自信もつて独立したと考えるべきであろう。次にそれ等のことを少し考えてみたい。

呉山は多芸多才で幅の広い趣味を持つていたが、その中核をなしていたのは分茶道であつたと思われる。その茶道が陶工としての呉山を育てる上にも大きな力を及ぼしているのも、呉山の個性あるいは呉山の芸術を考えるには、茶道よりの影響が如何に大きなものであつたかを念頭においておかなければ正当な評価はなし得ないように思われる。

呉山が茶道を習い始めたのは何時頃のことであるか、はつきりしたことは分らないが、相当若い頃から茶の道に入つたのであらうと云うことは、呉山の作陶の経歴からみても想像はつくのである。

呉山が陶磁器に興味をもちその道を志したのも、祖父の代から焼物にあるていど関係があつたとは云え、そのもとはやはり茶道を通じてであつたと思われる。呉山は茶道を学んでいゝうちに自分で茶碗を捻つてみたいと思ふようになり、それが後に本格的に陶工となつた、もともとの動機ではなかろうかと思われる。したがつて呉山は当時の一般の陶工と異なり、まだ物心もつかない年少の頃より、その道に入り修練を積んだのではなく、茶道を通じて焼物に興味をもち、相当の年頃になつてから、云うならば中年になつてから本格的にその道に入つたのである。このことは焼物に本当の趣味を持つてその道に入つたと云う強味と同時に、陶工となるには、よほど若い頃からその道に入つて習練をつまなければ一人前となることは難しいと云われる。それらのことが呉山の場合には、ある程度事実となつて現われていると思う。

焼物に興味を持つて陶工となつた強味としては、中年になつてから入つたのでは難かしいと云われているにもかかわらず上達が早かつたと云うことと、生涯を陶工として貫ぬき通し得たこと及びその作品に如何にも数寄者の作らしい風格を出し得たこと等があげられる。

また弱味としては技術上の問題で、陶工としての呉山に生涯付きまとい呉山芸術の限界と

なっている。

さて、呉山は末茶碗を自分で捻つてみたいと云う動機から陶工の道に入つたのであるが、その初めはやはり楽焼より始めたものと考えられる。そのことは後に本窯について多分学ぶことの多かつたであろうと思われる横萩一光との関係からも想像されるし、また楽焼の作品が多数現存している点からも考えられる。

金沢には寛文年間より楽の脇窯と目される大樋焼があり、その陶工も多数いたので呉山には好都合であつたと思われる。呉山は大樋焼の技術習得には相当な情熱を注いだらしく、大樋焼の飴茶を掛けた作品が非常に多くその中には大樋の印を捺した作品もある。また当時すでに優れた陶工であつた横萩一光に楽焼の法を教えたと云われることによつて、呉山が横萩一光と知合つた当時すでに、その技倆は相当なもので楽焼については一家の見識をもつていたことが分る。呉山が自分で楽焼の窯を持つたのは文久年間のことで、卯辰山の山麗鶯谷の伝燈院の辺に窯を築き、盛んに楽焼を製したと云われている。そして呉山の楽焼は、大樋焼に学んだことは事実であるが、のちには大樋焼より脱却し、呉山独特のものを製するに至り、呉山の楽焼には識者は特に呉山焼と称して特異な地位を与えている様である。

呉山が一光と知合つた、はつきりした年代は分らないが、卯辰山焼に於てであつて呉山は一光より本窯について非常に多くのことを学んだことと思われる。

卯辰山焼とは、通称瓦師兵衛と云う人が安政の頃より明治初年まで瓦窯の前窯を利用して、横萩一光や京都の玉鉾亀吉あるいは原呉山・野崎佐吉等を招いて作らしめたものである。その製品は染付とか鉄錆にて絵付をしたものが主で、稀に上絵付のものもある様で、気韻高尚で木米の作品を偲ばしめるものもあると云われている。しかし残念乍ら卯辰山焼と称せられる現存の作品の中から各々の作家の作品を識別することは、作家個人の銘印もなく現在のところ非常に困難である。

以上の様な窯であるが、一光がここに関係したのは明治元年頃より同三年までなので、呉山が一光と知合つたのもその頃と考えられる。一光はその後明治四年より明治二十九年まで鶯谷久田窯を中心に陶工として活躍してたので、一光との交際は相当長期間続いていたものと思われる。そして、その出会はお互いに誠に幸運であつたと思われる。呉山が一光に楽焼の法を教えたと云つてもそれは次の様なことであつたようである。一光は呉山に茶道を学び、その茶道を通じて楽焼の趣味について教わつたのであつて、製陶の技術については当時すでに一光は一家をなしており、むしろ呉山の方が一光の弟子であつたと思われる。

一人前の陶工となるには、然るべき指導者について製陶の技術を学ばなければならないのであるが、呉山についてはその指導者がはつきり解っていない。しかし、呉山が特に製陶の法を学ぶために他の地方へ行つたような形跡はなく、やはり地元の金沢で習得したと考えられるのである。当時の鶯谷を中心とした金沢には一光以外に適当な人がいないので、どうも一光がその師であつたのではなかろうかと思われる。いずれにしてもお互に影響しあつて、その芸術を育成していつたのではなかろうか。

一光の外に、今一人いろいろと学ぶところが多かつたであろうと思われるのが、永楽和全である。呉山が和全と知合つたのは、丁度一光と知合つたその頃ではないかと思われる。和全が山代へ来て、いわゆる永楽窯を興したのが慶応元年で、それ以前より親交があつた形跡は現在のところ見当たらないので呉山と和全の交際は和全が山代へ来てから始まつたものと思われる。

和全と山代の関係は、次のようである。それは安政年間に大聖寺の物産役所が、山代の人である三藤文次郎、および藤懸八十城の兩人に山代窯を管理せしめ、資金を貸与して保護奨励をし、その窯名を四代九谷本窯と称させた。しかし兩人は慶応元年京師より、名工永楽和全を招聘せんと欲し、之を藩主前田利瑑に乞うた。利瑑は京師に朝するに当たり、家臣を遣わして命を伝えさせ、九谷陶磁器の衰勢を挽回して国産を増殖すべきことを託した。そこで和全は慶応元年二月に義弟の西村宗三郎を従えて山代に来ることとなつた。和全は早速木崎萬龜の春日山の窯で製陶を督し、従来の原土の改良を志し、郡内を普く視察して遂に荒谷の良土を発見した。また燃料に雑木を用いていたのを松材に改めたりして、従来の九谷焼に比して素質に形態に装飾に種々改良を加え、著しい進歩をなし、山代に在ること五年にして京に歸つた。その期間こそ暫くであつたが、その間九谷焼の向上に非常な寄与をし、後世まで影響するところ甚だ大きいと云われている。

和全は当時すでに名工の誉が高く、呉山もその令名はよく知つていて、早速山代に和全を尋ね、それより二人の交際は始まつたものと思われる。そしてその親交はずつと続いていたようである。脇本十九郎著「平安名陶傳木米」に呉山の茶道の弟子で金沢の茶人であつた高野如月庵の次の如き談が載っている。

「……嘗て共に京都にゆき和全の家を訪ふに、和全は呉山の来たのを喜んで、折ふし作り上げた光悦うつしの茶碗に光悦の状を添へて呉山に贈つた」と……

呉山と和全が親しく相接して話し合えたのは、和全が山代にいた僅かの期間であつた。し

かし、和全ほどの名工に直接親しく接することの出来た呉山はおそらく多大の好影響を被つたことと思われる。とくに呉山の磁器には、明らかに和全の影響と思われる点が多いようである。また呉山と山代の関係は、その後呉山の晩年まで続いた。

さて、呉山は茶道よりまづ楽焼に入つたのであるが、初めて楽焼を習つたのは何時頃かよく解らない。しかし文久年間には自分で楽の窯も持ち、その後、明治初年頃卯辰山焼に関係し、その間横萩一光や、永楽和全等の優れた陶工と親交を結ぶようになり、呉山もいよいよ陶工としての腕も上達し、また自信もついたので、明治十二年卯辰山麓鶯谷の伝燈院の近くの、もと楽窯のあつたところに登窯を新築し、職人も集め、本職の陶工として出発することとなつた。

呉山は多分得意の絶頂にあつたことと思われるが、脇本十九郎著「平安名陶伝木米」に高野如月庵の次の如き談を載せている。

「鶯谷の窯を築いたのは明治十年頃(「陶磁考草」に十三年とある。)であつて、好事家の窯としては餘り大きい為二窯ばかりで中止し、その後は堅物は山代で焼いて居た。」

この談話によれば明治十年頃窯を築いたことになつてゐるが、「原呉山具申書」には「明治十二年陶器ノ業ヲ志シ聊營業トナン候事」となつてゐる。これは明治十年頃新窯を築き、暫く窯の乾くのを待つ間、職人を集めたり、焼成すべき作品を作る等の準備をし、十二年に初窯を焚いたと解すべきでなかろうかと思われる。

呉山はこの窯で南蛮、交趾、御本写等の茶器類を主として作つたようで当時の人はそれを向山焼と称していた。

しかし、如月庵の談によれば、「好事家の窯としては餘り大きい為二窯ばかりで中止し、その後は堅物は山代で焼いて居た。」と云うことであるが、確かにこの頃から後山代の白銀屋に錦窯を築いたりして、しばしば山代へ行つて磁器の類を焼いていたようで、染付、赤呉須、金襴手、乾山、古九谷写等をも製していた。

ところが、現存の作品から察すると、陶器あるいは炆器の類はその後も鶯谷で焼いていたと思われる節が多分にある。あるいは後に窯を改良し再び鶯谷でも焼いたものか、それとも一光あたりの窯に時に入れさせてもらつてゐたものかこの点は今後の研究課題の一つである。しかし楽焼の方はずっと続けて焼いていた様である。

呉山は明治十八年の共進会に作品を数点出品している。勿論呉山は相当張切つて出品したことと思われ、このため呉山は、わざわざ上京している。当時は旅行するにも役所へけ届が必要であつたものらしく、その届けが現存している。

発足届 明治十八年五月十四日

爲共進會用東京へ向二ヵ月

間罷越本日当地出足仕

候間此段御届申候也

留守中代理

金沢区鶯町二十四番地企居

原 伊 左 エ 門 印

戸 主

金沢区鶯町二十四番地企居

原 与 三 兵 衛 印

歸宅御届 明治十九年四月十九日

私儀共進會用トシテ明治十八年

五月十四日ヨリ東京へ罷越候

處本月同日歸宅仕候也

金沢区鶯町二十四番地企居

原 与 三 兵 衛 印

留守中代理

原 伊 左 エ 門 印

共進會への呉山の出品作の評は、農務局 工務局 明治十八年十一月刊行の「繭絲織物共
陶漆器進會審査報告」「第四区第一類 陶器」

と云う報告書に出ている。

概論の石川県 土器の項に

『金沢鶯町原與三兵衛（號呉山）ハ點茶ヲ善クス出品ハ點茶碗、盃洗、鉢等ニシテ其點茶碗ハ尋常ノ作敢テ称スルニ足ラス青釉ノ盃洗ハ釉藥ノ鎔解美ニ紋様溫雅ニシテ西京樂吉左衛門青樂ノ皿ニ比スレハ甚タ勝レリトス』

と批評され、また第四区第一類出品審査擬賞薦文の項では五等賞四十四人の中に入っていて次の如く評されている。

『青樂平鉢

石 川 縣 原 與 三 兵 衛

茶碗ノ製少シク點茶用ノ要點ヲ欠ク青樂鉢ノ如キハ鎔釉度ニ適シ青色紋様共ニ溫雅ナリ』
呉山はこの様に共進會にも出品し陶工としても、いよいよ認められる様になつたのであるが、呉山自身は陶工とは云つておらず、当時のいわゆる「壬申戸籍」の職業欄には「陶器土

焼卸売商」と届けていたことが注意される。

その後の陶工としての呉山は順調な進展であつたものか、特に記すような事件はながつた模様であるが、明治三十年九月二十八日病を得て金沢区薦町二十四番地で死亡した。法名は青竹菴入譽呉山真翁居士と云い、墓は金沢市野田寺町五丁目極楽寺にある。

呉山の弟子

呉山は弟子にめぐまれていた。その主な人をあげれば、陶工では諏訪蘇山や須田菁華あるいは小松の沢守六手等があり、また茶道の弟子には高野如月庵や小松の筒井彦次等がある。

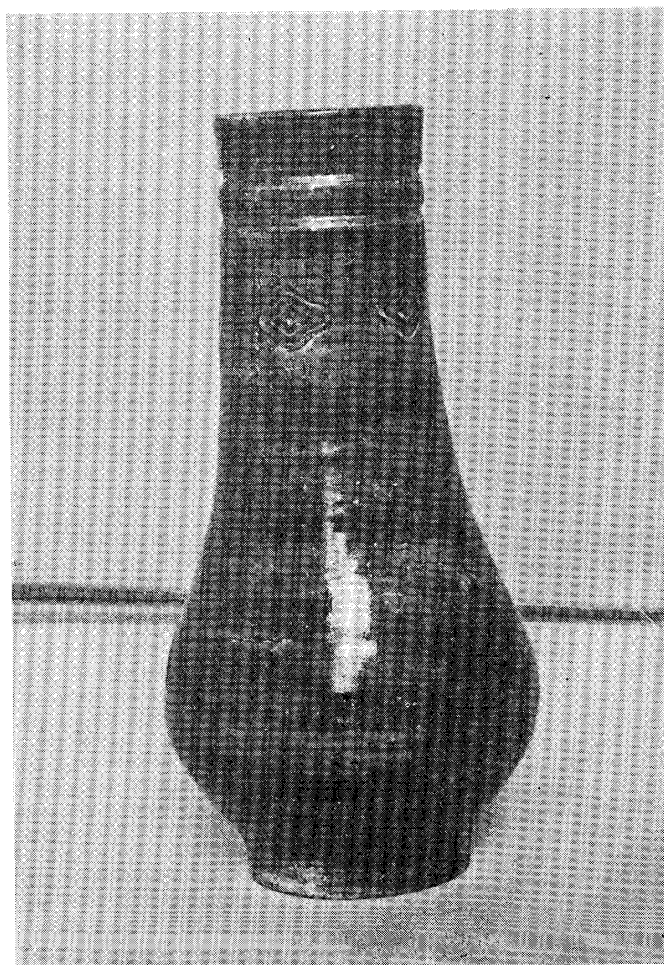
特に諏訪蘇山や須田菁華は各工としての誉れ高く、また作家ではないが筒井彦次も美術界と関係深い人である。次にその略伝を付しておく。

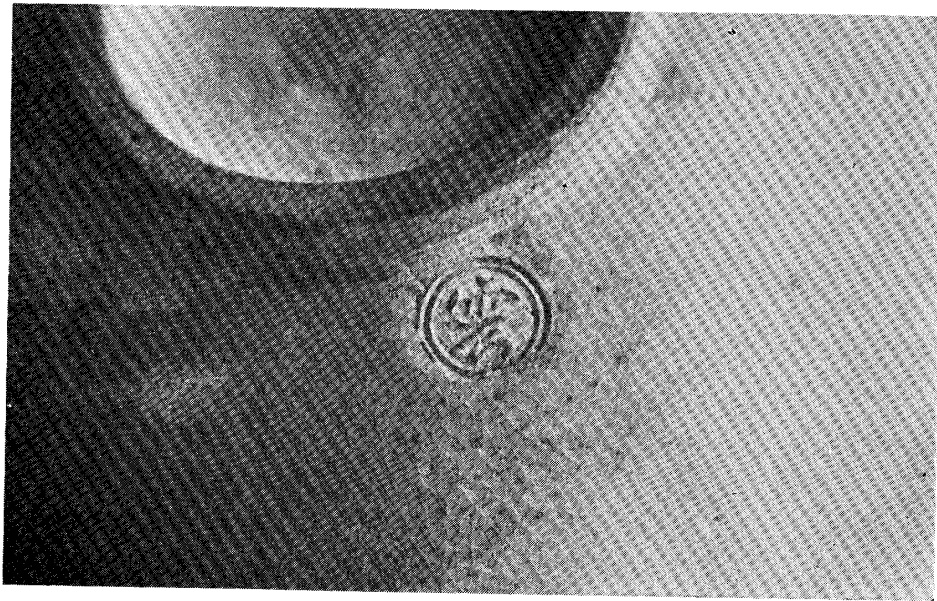
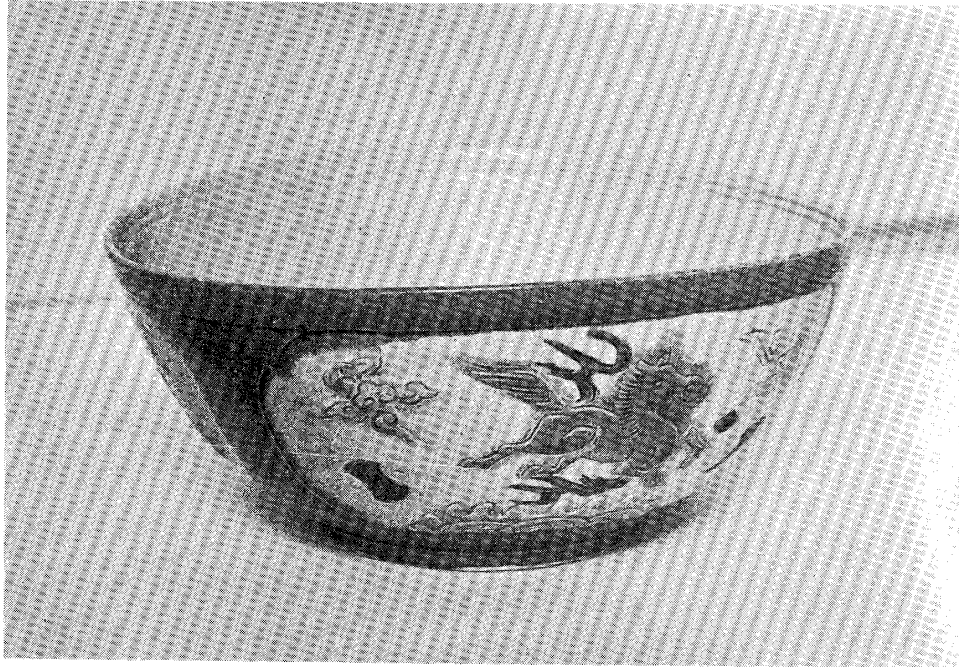
諏訪蘇山は嘉永五年に金沢に生れ、名を好武と云い蘇山と号した。年少の頃より縁戚の呉山に私淑し、明治八年東京にて陶画業を始め、同九年品川駅大井村に陶器工場を設立し、主として塑型による器物を製した。同十二年に石川県勸業場の製陶助手となり、十三年山代村九谷陶器会社の技師に招聘せられ、おること五年、その後明治二十二年石川県立工業学校助教諭試補を命ぜられ、二十五年助教諭に任ぜられ、彫刻科を担当していたが、二十九年その職を退いた。

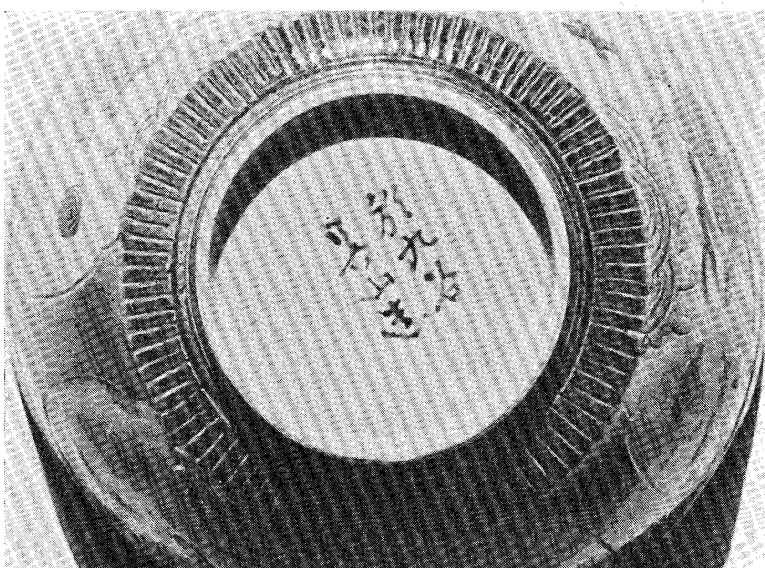
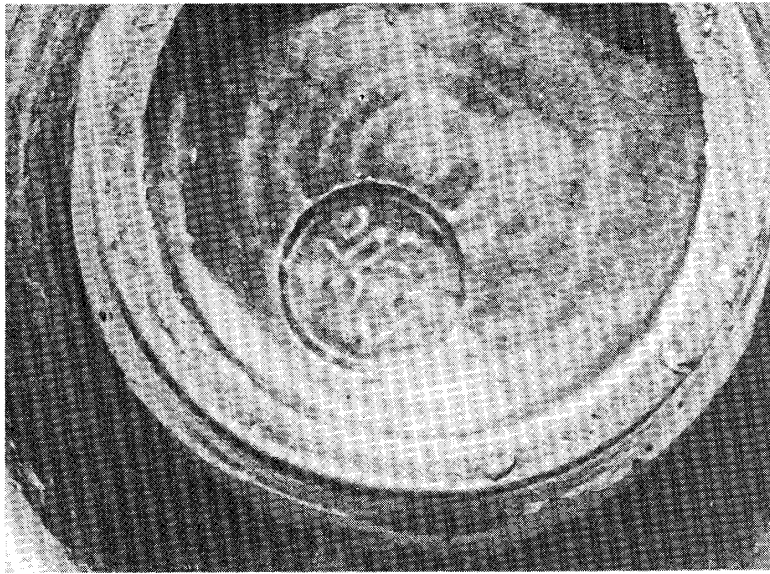
三十三年京都の錦光山製陶工場に入り、三十九年まで勤続し、四十年に独立して京都に於て製陶を始めた。大正三年朝鮮李王家に於て高麗窯旧窯を発見し、その取調を囑託せられ、次で李王家に於て高麗窯再興の議成るにより、その設計及び焼成の任に当り、好成績を挙げたので、その功を賞せられ四年李王家より銀盃及び酒瓶並びに銅印を下賜せられた。大正六年帝室技芸員に列せられ、八年久邇宮家より御紋章付金印を下賜せられた。大正十一年歳七十二で歿し、女虎子はその業を襲ぎ、二代蘇山と云つた。

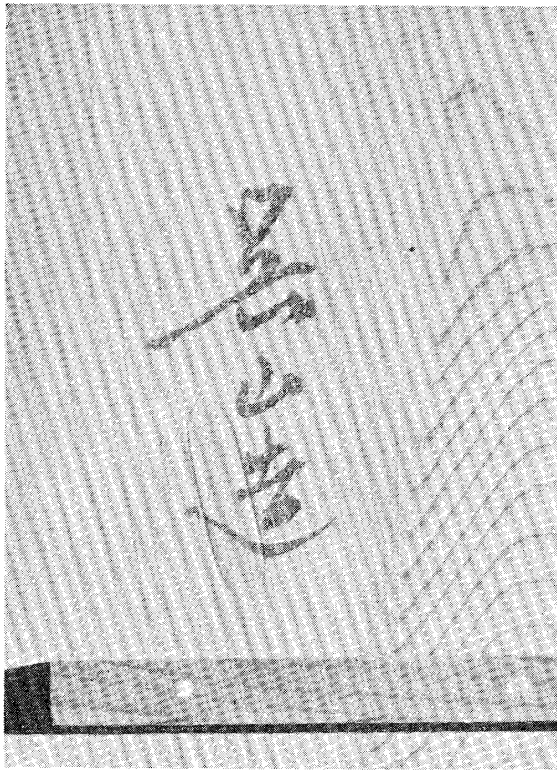
須田菁華は文久元年金沢市泉町に生れ、初名を与三郎と云い菁華と号した。明治十三年石川県勸業場陶画部を卒業し、京都に行つて製陶の研究をし、十六年山代に行き九谷陶器会社の陶画を著けることとなり以来居を山代に移した。二十四年同社解散の後独立して陶画業を始め、三十九年自家専用の磁器窯を築き、特に染付・祥瑞・安南・伊賀・萬曆・古赤絵・古九谷・古伊萬里・鍋島等の仿古作品に妙を得、明治陶界の名工と称さるるに至つた。久しく、石川県工業教育諮問員や江沼九谷陶器同業組合組長等の任にあつたが、昭和二年歳六十六で歿した。男吉次その業を継ぎ、二代菁華と号しその作先代に髣髴としたものがある。

筒井彦次は小松の代々両替店及び酒造業を営む商家筒金屋彦右衛門の長男に生れ、幼名を









鶴松、初名を又七と云った。明治八年貿易視察の爲清国に航し、翌九年より製茶製陶を始め、大いに輸出に力を注いだ。十一年自家に陶画工場を設けて坂昌之・中川作松等数十名をして盛んに製造せし、め十三年より九谷の名匠松本佐平を顧問として良品を製し、同年大阪に支店を開き、また神戸に販売店を設けた。十五年川尻嘉平等と謀り、白磁改良の爲め八幡村に一大円窯を築く。二十年能美郡物産陳列場通成館の開設と共に自費を投じて傍に一館を建て待興樓と称して、内外の物産を蒐めて参考に資した。また付近に街路樹を植え橋梁を架し、その他慈善救恤等の篤行多く、しばしば表彰せられた。二十五年松本佐平と謀り、大家秀之丞を招聘し、九谷焼の置物の改良を成し、同年横浜に支店を設け、専ら九谷焼の輸出に尽瘁す。

是れより先き産業としての九谷焼育成の功労多き飛鳥井清の陶器会社を助け、また実業教育に大功労のあつた納富介次郎の工芸振興の策に参与し、あるいは図案の木村立峰・山本光一、彫刻の村上九郎作、冶金の秋山次良平、陶画の安達陶仙・長元三次郎等の良工を励まし資金を与え石川県の美術工芸界の向上発展のため大いに貢献し、明治三十三年歳五十八で歿した。息子又七その業を襲ぎ大正六年小松町の町長に任じ同十一年歳五十八で歿した。

呉山にはこのような優れた弟子のあつたことは誠に幸いであつた。これ等の人達は茶道そのものを学んだ人は云うまでもないことであるが、後に陶工として名をあげた諏訪蘇山や須田菁華等も、製陶技術の方面よりも茶道を通じて、焼物の趣味あるいは焼物の見方と云つた精神的な方面の影響が大きかつたと思われる。

呉山は中年になつてから陶工の道に入つた人で、そこに呉山の技術的な限界があり、製陶技術の面のみから見ると、専門陶工としてはあまり巾の広い人とは云われない。その様ような呉山が製陶技術の面では後進の人達にどれ程の指導が出来たものか甚だ疑門の点が多いのである。しかし呉山はいわゆる焼物師と云うより、今日のデザイナーと云つたような性格の人であつたと考えられるので、その点ではなかなか優れた指導力を持っていたのではなからうか。いずれにしても呉山が為さんとして技術的な面から出来得なかつたことを、その弟子達が立派に解決し、それぞれ陶工としても最高の榮譽ある地位にまで到達し得たことは誠に幸いであつたと云わなければならぬ。

特に須田菁華には晩年まで呉山は種々世話になつており、呉山の本窯の作品の大多数は菁華の窯にて焼成したものと考えられている。

作 品

呉山の作品は楽焼、南蛮、交趾、染附、万暦、古赤絵、御本写等なかなか種類が多い。し

かし、いずれも茶器の類が主で雑器と云つた様なものは至つて少ないのが一つの特徴である。このことは呉山の経歴に徴してもうなずかれることであるが、呉山の芸術を支えているのは茶道であつて、しかもそれが徹底的であつたことが当時の一般の陶工とはいささか異なつていたところである。

それに加えて和歌や俳句や書を習い、また絵もあるいは梅田江波にでも習つたものかなかなか上手であつた。要するに呉山は非常に高い教養を持つており、文人的な性格をも多分に持つていたのである。

脇本氏もかつて呉山の旧地を訪ね、その時のことを「平安各陶伝木米」の中で次のように云つている。「曹洞宗傳燈院の境内に接するその舊地を訪ふに、窯跡の勾配、井戸など其儘に残り、建築物はすべて毀たけれども松、槭、多羅葉、露月と称する椿など植え込んだ庭は故人の数寄を偲ばせる。」

「如月庵の蔵する色紙形の香合には

青竹の垣や落葉の二葉三葉

と記し、「明治廿四年辛卯冬日」の年紀がある。

歌は、

音もせでふるとは見えぬ春雨にこけむす庭の色ぞそひゆく

露おもみ尾花くず葉をふりわけてきくもさやけき蟲のこゑごゑ

などその風尚を知るべきである。」

以上の如く呉山は当時の普通の陶工とは異なり、非常に高い教養と茶人として鍛え抜いた眼を持つていたのである。それ等の身についた教養がやがて作品の上にも現われ、一種の風格と気品を備える結果となつたのではなからうかと思われる。確かに技巧の点から云へば呉山よりもつと優れた人は当時でもいくらかあつたのである。しかし、呉山の作品には技巧を越えた一種の品格とでも云うべきものを持つている点が、その最も優れたところと思われる。

また呉山は茶人として徹した陶工であつた為、茶器が主で単なる飾物のようなものや大作の類は至つて少なく、いずれも茶に使えると云うことを念頭において製作している。したがつて呉山の楽焼は呉山芸術の中でも、特異な地位を占めているのである。

ところで呉山が陶工として、最も私淑していたのは青木木米であつた様である。木米は春日山窯の指導者としてこの地方の陶工達は皆等しく私淑し、中には木米の倣作のみを心かけている人もあるようであるが、呉山は私淑してもそのようなことはしなかつた、これはや

はり呉山の見識であろう。

一体呉山は中年よりその道に入つたので、技術的にある限界があつたので、形と釉薬のみで見せる作品よりも、何か一寸絵を描いた作品に傑作が多い。呉山もあるいはこの点を心得ていたのか、例えば青磁のようなものには手を出さなかつた様である。しか呉山の弟子であつた諏訪蘇山は青磁で有名であつた。

呉山の評価は昔から種々云われているが、文献に現われた最も古いところのものは、前に引用した明治十八年刊行の「共進會審査報告」の評であるが、明治二十八年発行の加藤恒著「加賀越中陶磁考草」には呉山について次の如き記事が載っている。

「金澤市鶯町ニ原呉山ト云フモノアリ元點茶ヲ好ミ樂焼ヲ製シ明治十三年陶器窯ヲ造リ陶磁ヲ製スルニ至ル」

「鶯谷ニ二窯アリ一ハ尋常九谷ノ流亜ニシテ一ハ原呉山カ木米ノ遺風ヲ追ヒ古雅高尚世人ノ賛賞ヲ得ルモノタリ」

また近年の批評の代表的なものとしては、松本佐太郎著「定本九谷」で次の如く云っている。

「……呉山元来工匠にあらず、自ら手を下して作れるもの稀なりと雖も、熟達せる陶工を招き、意匠・形式・技工尽く仔細に指導し、即ち呉山の精神を籠めたるものに款印せる故に、呉山も亦名工と称するを妨げざるべし」

松本佐太郎は九谷焼近世の名工の一人であつて、しかも非常な情熱をもつて九谷焼の歴史をも研究された人であつて、その批評も正に正鵠を得た批言と云わなければならない。

銘

呉山はその作品に種々の銘を入れているが最も多いのは丸い呉山の印である。その印にも二種類あり楷書で呉山と書いた方が多く使用されているようである。その他よく見受けるのに丸に震の字を書いたのがあるがこれは初期の作品に捺された印で、震とは卯辰山の卯を雨とし、辰と組合せて一字としたものである。楽焼のものには大樋の印を入れたものもある。変つた印では臥龍山と入れたものもあるようである。臥龍山とは卯辰山の別名である。

印の他に篋で彫銘をしたり、絵具で書銘をしたものもある、多いのは呉山・あるいは呉山造ときには於九谷呉山造等その時々によつていろいろ変つた銘を入れている。

箱はあまり立派なものではなく、材料も杉が多いようである。箱書も呉山造と書き印を捺したものが最も多く、中には震山陶工呉山とか、於九谷呉山造とか変つた書き方をしたものもある。箱に捺した印も数種類あつて、中には印文不明の何点かがある。箱印で多いのは、瓢

簞形に青竹あるいは青竹庵とした黒肉の印であるが、細長い楕円形に青竹庵と書いた朱肉の印も割に多いようである。

結 び

呉山は単なる職人ではなく優れた茶人であり、当時の一般の陶工には見られない高い教養の持主であつた。それが呉山の製陶の技術的欠陥をよく補つてその作品を風格あるものになっている。

当時の九谷焼は一般に技巧の勝つたものが多く、茶陶の類は割に少ないのであるが、茶人であり、陶工であつた呉山は、専ら茶陶を志し、九谷地方の陶工としては、特異な存在となつている。この点は、やはり九谷焼の陶工と云うより木米の春日山窯の伝統を持つている鶯谷の陶工である。

木米は文人陶工としてその滞在期間は短かつたが、春日山窯に於て大きな足跡を残している。したがつて木米に私淑する陶工は多いのである。

当時鶯谷には鶯谷庄平や、横萩一光のような優れた陶工もいたのであるが、なかでも呉山は文人陶工と云つた性格の最も強い人のように思われる。しかし、木米は煎茶趣味であつたのに対し、呉山は抹茶趣味であり、楽焼が呉山芸術の大きな柱の一つとなつている。

呉山は技巧の点では巾もせまく特に取立てる程のものではないが、楽焼から磁器まで一応は熟し、茶陶としてまとめ、またそのデザインは優れている。この点が陶工としての呉山芸術の本領でありて、一般の陶工の追従を許さないところであつて、明治時代に活躍した陶工として忘れることの出来ない一人であると思われる。

また優れた弟子を持ち、各々に大きな影響をあたえた点も見逃すことができないように思われる。